

家庭菜園でトマトを育てる。今年の実践と反省。

koberyo1

平成26年の秋ごろだったろうか。我が家には出入りの大工さん、――Sさんという方がいる。折からの気象変動である。わたしは自宅の庭を家庭菜園にしているのだが、大工のSさんに依頼して雨よけのビニールを例年よりも1メートル高くしてもらった。それから風に飛ばされないよう、杭を土中深く埋めこみ、強度を高める工夫をしてもらった。これで、まあ一安心ではある。トマトづくりは毎年のことではあるが、自然現象は侮れないけれど、トマトの出来柄を9月中旬まで楽しむことができる。

苗は五月の連休前の4月29日に売りだすという情報をJAで耳にした。発売日には胸を躍らせた。中玉をつける苗を11本、小玉をつけるものを10本、あわせて21本購入した。

春は天候の変化が大きい。これは庭に出るからわかるのであって、家のなかでテレビをみていてはまずわからないことだ。冬から春にかけての時期、風がとりわけ強いことが挙げられよう。平均して5、6本は例年、風によって折れるので今年、苗を畑に移すのは低気圧がおさまってからにした。

では、トマトを育てる段取りを書いてみよう。

まず購入してきたポット（苗を入れているビニールの黒い容器）のなかの苗を大きくするため、さらに大きめサイズのポットに移し替え、不足の土を押し込んで転倒しないよう配慮する。それをカエデの木陰に21本、水を与えやすいようにまとめ、それから風の害を防ぐため、風よけのビニールのスダレをつくり、周囲を囲った。

前にもパプーで書いたと思うが、トマトの原産地は南半球のアンデス山脈で標高は2000メートル級の山々がつらなるところだ。乾燥し、荒れ果てた土地である。日本はそこよりも遥かに雨量が多く、日照量も少ない。ということは我が家の庭はアンデスと比べ、トマトにとっては適さない環境だといえる。とはいえ、どんなに良好な苗であっても肥料の与え方ひとつ間違えただけで失敗してしまうのだからトマトはむずかしい。

例年なら、牛糞（ぎゅうふん）を漉きこんだ畑を高い「うね」にする。余分な水分が入らないことがトマトにとって理想の生育環境であるが、なかなかそうは毎年、うまくはいかない。

植え付けは5月の末日になった。今年は趣向を変えてみることにした。「うね」を高くするこ

とをしなかった。また肥料も牛糞も入れなかった。わたしには試してみたいことがあった。

それは「万田酵素」である。

最近、テレビのCMでもみるようになったが、健康食品のメーカーで広島の因島にその本拠がある。そこは健康食品ばかりではなく、肥料も扱っているのだ。むろん「酵素」を肥料にして売っているのである。なので人の体に良いものなら、植物にも良いという発想なのだろう。その肥料を使えば、子どもの背丈ほどもあるお化け大根が収穫されるそうだ。実際、酵素で育てられたお化け大根を写真で見たことがあったので、わたしは興味津々だった。なので、わたしは万田酵素の肥料を使うことにした。もう昨年まで使っていた牛糞とはおサラバである。半信半疑ながら、お化けトマトが収穫できたらいいな、と思っていたのだが、その顛末についてはおいおい明らかになってゆくだろう。

カエデの木陰の苗には2日に一度の割合で水を与えていたので、ポットだけで苗はすくすくと80センチまで伸びていた。スタレで囲っていたのも風を防げてよかったのかもしれない。

ついにポットから畑への植え付けを開始する。5月の末には去年ほどには高くない「うね」をつくり、幅70センチくらいの中央に苗をポットから移した。もちろん同時に支柱を立て、風邪対策にそなえた。もうすでにその時点で花をつけた苗があったほどだ。

6月は雨が多かったが、比較的多く開花してくれたと思う。7月には中玉が大きく実りはじめた。小玉は房となり、葡萄のように垂れ下がった。

この時期に万田酵素を投入。液肥（液体の肥料のこと）を与えた。

液肥をさらに水で薄め、2リットルのペットボトルに入れた。ペットボトルを利用したのはたんに持ちやすいという理由だ。

早いものは7月から赤々として太った実が収穫できた。しかし収穫はしたが、わたしの感覚では糖度は感じられず、糖度計を使うのがなんとかなしに怖かったし、落胆するのが怖かった。

万田酵素の液肥だけで、できた実がいかなるものか興味があった。しかし、食べてみて糖度が少ないと感じてしまった。これは雨が多く、やはり日照が不足したせいではなかったか。

それでも長男と長女はよろこんでくれた。長男の感想だが、例年のものと比べ水っぽくなく果汁たっぷりのトマト、しかも実がつまったトマトだそうである。たしかによく太った実が収穫さ

れたように思う。長男は「万田酵素のお蔭だね」と言っていたが。

反省は以下の点である。

とはいえ、いくら反省したところで自然や気候、雨にはやはり人はどうにも及ばないし、それでも努力はしたいと思っているので、やはり牛糞を使ったり、「うね」をもっと高くしようと思った。

それから来年からだが、長女の意見を容れて小玉は作らないことにした。小玉は面白みに欠けるし、雨にあたると割れたりする。また早く腐るし、保存がきかないときている。なので来年は早期に土づくりをすることに決めた。黒マルチを張って雑草をおさえ、その上で万田酵素の液肥をもちいることが最善の方法だろうと思ったし、反省もした。

台風でせいで2本折れたが、例年と比べて良かった方だ。

わたしがトマトを作る目的は、88歳というわたしの年齢にあった、ある意味では老人にふさわしい健康法ではないか、と思う。まったくもって採算を度外視した趣味だけど、トマトを作るそれ自体がわたしにとって幸福なことなのだ。